

高校生の自己意識が制服着装行動に与える影響について

古結 亜希*・松浦 均**

The Influence of high-school students self-consciousness to putting school uniform

Aki KOGETSU and Hitoshi MATSUURA

要 旨

本研究の目的は、高校生の学校生活における制服着装行動について、自己意識という視点から明らかにしようとするものであった。制服着装行動の測定を試みた結果、女子、男子ともに1年生に比べて2年生の方が校則からの逸脱傾向の高い制服着装行動を選択していることが明らかとなり、1年生と2年生では生徒が形成している制服着装行動に関する集団規範が異なる可能性が示唆された。また、対人的な不安意識が、学校規範・ルールに対する意識や、制服を着装する際の意識に対して最も多くの影響を与えていることが示唆され、特に1年生にこの傾向がみられた。当該高等学校でみられた制服着装行動は、かっこよく・かわいく着こなすことができる自分を見て欲しいという自己呈示的な動機によるものもあるが、他方で自分が周囲の生徒から浮いていないか、目立ちすぎていないかといった評価懸念意識が強く影響した行動であると考えられた。

問題と目的

青年期は自己同一性の確立を課題とし、自己への関心が高まる時期である。青年期中期、いわゆる思春期にあたりと考えられる高校生は、親からの分離をその発達課題とし、その対応として自我体制と仲間関係の形成が中心的なテーマとなり(下山, 1998)、自己評価が不安定であることが指摘されている。また、青年期には自分自身や他者の身体的魅力や特徴を気にし、自分の外見が他者から見られているという意識や、他者に対する関心を強く持つ時期(羽賀・渋谷, 2006)であることから、着装行動についての関心が高くなる時期であることが考えられる。社会的に自立していく準備段階である青年期は、他者とは違う自分の個性を磨き、自身の行動に活かしていくことが大切であるともいわれている。このような時期に、自己の欲求と社会的な規範との折り合いをつけ、自己のありようを受容できることは重要なことであると考えられる。

青年期においては、認知される自己が、外面的なものから内面的なものへ移行することが指摘されており

(Rosenberg, 1979, 1986)、さらに内省力の高まりが自己意識と他者からのまなざしに対する感受性を高めることが指摘されている(Harter, 1990)。これらの傾向は平石(1993)においても確認されている。したがって、高校生においては、他者から見られる自己への注意の向きやすさである公的自意識だけでなく、自己の内面への注意の向きやすさである私的自意識も高まると考えられる。

この自己への注意の向きやすさについては、たとえば被服の着装行動に与える影響について検討されている。牛田・高木・廣瀬・福岡・光澤(1996)によれば、見られる自分への注意の向きやすさである公的自意識と被服による「心理的安定への関心」について正の相関がみられ、着装行動と心理的安定が関連していることを示唆している。また、社交や楽しみに関わる場面における自身の服装への意識が、自意識と有意に相関するものが多くみられた。つまり、友人や仲間と一緒にいるときには、被服への関心が高まることを示しているといえよう。

さて、これらの点を踏まえて青年期にある高校生に

* 名古屋市役所子ども青少年局子ども育成部

** 三重大大学教育学部学校教育講座

本論文の内容は、第2著者の指導のもとで第1著者により三重大大学大学院教育学研究科に提出された修士論文の一部に、加筆・修正を加えたものです。

着目すると、昨今の高校生の制服着装行動においては、心理的要因が影響していると考えられる。

制服を規定している高等学校の多くは、制服の着装スタイルを生徒心得として明文化しており、通常この規則に従うよう生徒指導をおこなう。しかし普段、街で高校生を見る限り、必ずしも校則通りの着装行動をとっているとはいえない状況がある。近年は、むしろ生徒を厳しく管理するような学校体制ではなくなり、制服着装行動にも様々なバリエーションが存在し、学校によっては最初からいくつものバリエーションを用意している場合もあるようである。したがって、高校生がその着装行動に至るまでには様々な要因が入り込んでいると考えられる。

ところで本来、制服は集団成員の同一性を象徴するものである。しかし一方で、人は集団の中で「同調性」と同時に「独自性」、「個性」を追求するものである（カイザー, 1994）。さらに、一貫した少数者の行動が他者に影響を与える（Moscovici, S., Lage, E., & Naffrechoux, M., 1969; 細江, 1990）ということからも、制服という定められた枠の中であっても、少数の独自性追求の結果が、生徒集団の中ではそれが規範となり、校則を無視してまでも生徒間において妥当なものとなり、最終的に多くの生徒がその着装行動をとるようになると考えられる。

心理学において「規範」とは、社会や集団において個人が同調することを期待されている行動や判断の基準、準拠枠であり、行動の望ましさを含むものである（小関, 2002）。つまり、学校側からすれば校則通りの着装行動が規則遵守にあたる望ましい規範であるのに対して、生徒側からすればそれは生徒の「望ましさ」を反映した行動であるとは限らず、校則に準拠しない生徒独自の着装行動が、彼らにとって集団規範として機能している場合があると考えられる。

本研究では、高校生男女の自己意識をはじめとする社会的変数と制服着装行動との関連を検討することを目的とする。自己意識の有り様（菅原, 1985）や、被服への関心度については性差が指摘されていることから（福岡・高木・神山・牛田・阿部, 1998）、制服着装行動においても男女でその傾向が異なる可能性があるため、男女毎に分析をおこなう。

方 法

調査対象 三重県内の公立 A 高等学校に在籍する 1・2 年生を対象に質問紙調査をおこなった。各学年 8 学級のうち 3 学級を抽出した（1 年生男子 61 名、女子 59 名、2 年生男子 54 名、女子 67 名）。

当該高等学校の制服（冬服）は、男女ともに上衣は紺地のブレザー、下衣は上衣と同生地ズのズボン（男子）、スカート（女子）である。なお男女ともネクタイを指定している。

調査時期 第 1 回調査は平成 21 年 6 月上旬、第 2 回調査は平成 21 年 10 月下旬から 11 月上旬にかけておこなった（以下調査 1、調査 2 と示す）。

質問紙の構成

1. 自己意識

自己への注意の向きやすさを測定するため、自意識尺度（菅原, 1984）より「公的自意識」、「私的自意識」を各々 5 項目、対人不安尺度、自己顕示性尺度（バス, 1991）より各々 5 項目を用いた。各項目について「1. 全くあてはまらない」から「7. 非常にあてはまる」の 7 件法で回答を求めた。

2. 個人志向性・社会志向性

自分独自の規準を尊重する傾向、社会の規範を尊重する傾向を測定するため、個人志向性・社会志向性尺度（伊藤, 1993）より 16 項目を用いた。各項目について「1. あてはまらない」から「5. あてはまる」までの 5 件法で回答を求めた。

3. 学校規範・ルールに関する意識

学校生活に関わる規範に関する 12 項目について、「1. 非常に反対」から「5. 非常に賛成」の 5 件法で回答を求めた。

4. 制服着装行動に関わる意識

制服を着装する際に意識することについて全 18 項目でたずねた。各項目について「1. あてはまらない」から「4. あてはまる」までの 4 件法で回答を求めた。このうち 1 項目は男女で異なっていた（かっこよく/かわいく着こなしたい）。

5. 制服着装行動

どのような制服の着方をしているのかについてたずねた。予備調査で得られた制服着装行動の逸脱度評定値を参考に、イラストとともに 10 項目を並べた。逸脱度が 4 段階になるよう配置されたカテゴリーから自身の制服の着方に最も近いものに印をつけ、かつ該当する現在の着装行動にチェックをつけるよう求めた。

結果と考察

調査 1（6 月）における有効回答数は 230 名（1 年生男子 59 名、女子 56 名、2 年生男子 53 名、女子 66 名）であった。

調査 2（11 月）における有効回答数は 222 名（1 年生男子 55 名、女子 52 名、2 年生男子 51 名、女子 64 名）であった。

調査 1 および調査 2 における有効回答者のうち、両

調査に回答しかつ欠損のなかったものは164名（1年生男子31名、女子40名、2年生男子38名、女子55名）であった。

各変数について

1. 自己意識

各々について内的整合性を検討するためCronbachの α 係数を算出した。調査1、調査2の順に示す。「公的自意識」で $\alpha=.736, .786$ 、「私的自意識」で $\alpha=.609, .603$ 、「対人不安意識」で $\alpha=.779, .705$ 、「自己顕示性」で $\alpha=.768, .791$ であった。「公的自意識」、「私的自意識」、「自己顕示性」については逆転項目を除外し、これらと「対人不安意識」において残りの項目得点の合計を項目数で割ったものを各下位尺度得点とした。

2. 個人志向性・社会志向性

内的整合性を検討するためCronbachの α 係数を算出したところ、1項目を除いた「個人志向性」で $\alpha=.597$ 、「社会志向性」で $\alpha=.746$ であった。各々の項目得点の合計を各下位尺度得点とした。

3. 学校規範・ルールに関する意識

全12項目について、因子分析（最尤法、バリマックス回転）をおこなった結果、3因子を抽出したが、信頼性と解釈可能性から2因子が妥当であると判断し、採用した。第1因子（4項目）には、「先生の言うことは守らなければならない」など規則を守らなければならないという意識項目が中心に含まれており、「校則遵守意識」と命名した。第2因子（3項目）には、「どのように制服を着るかについての校則は必要である」など、校則の必要性についての意識項目が中心に含まれていたため「校則必要性意識」と命名した。各々について因子負荷量の高い項目を足し合わせ、項目数で割ったものを各下位尺度得点とした。Cronbachの α 係数を用いて内的整合性を検討した結果、「校則遵守意識」では $\alpha=.791$ 、「校則必要性意識」では $\alpha=.777$ であった。

4. 制服着装行動に関わる意識

全18項目について因子分析（最尤法、バリマックス回転）をおこなった。負荷量が低いものを除き再度分析をおこなった結果、3因子を抽出した。第1因子（5項目）は「カッコよく/かわいく着こなしたい」、「友人にほめられ、またうらやましがられるものを着たい」など、他者委により印象を与えたいという意識からなり、「自己呈示意識」と命名した。第2因子（4項目）は、「制服の着方によっておかしい人だと思われるか心配だ」など友人やグループといった周囲の評価に関わる項目が中心に構成され、「評価懸念意識」と命名した。第3因子（3項目）は校則通りに制服を

着装するという意識を中心としたものであり、「校則準拠意識」と命名した。各々について、因子負荷量の高い項目を足し合わせ、項目数で割ったものを下位尺度得点とした。Cronbachの α 係数を用いて内的整合性を検討したところ第1因子から順に $\alpha=.712$ 、 $\alpha=.753$ 、 $\alpha=.657$ であった。

5. 制服着装行動得点

カテゴリーA（基本型：買った状態のまま）に○をつけた者に1点、カテゴリーBには4点、カテゴリーCに6点、カテゴリーDに10点を与えた。カテゴリーBおよびCを選択をした者については、さらに自身にあてはまる項目がある場合に、1項目につき1点を加算した。したがって、制服着装行動得点の最小値は1、最高点は10となった。

本研究では自己意識特性が最も基盤となる概念であると仮定し、順に、志向性、学校規範・ルールに対する意識、制服着装行動に対する意識と並べ、従属変数は制服着装行動とする。調査1での制服着装行動得点には学年と性の有意な主効果がみられた（ $F(1,230)=26.4, p<.001$; $F(1,230)=91.64, p<.001$, Table 1参照）ことなどから、分析は性別毎・学年毎におこない、詳細な検討を試みることにする。

表1 全体調査のサンプル属性と主な調査結果

学年 性別	1年生		2年生		主効果		交互作用
	男子	女子	男子	女子	学 年	性 別	
制服着装 行動得点	2.46	4.66	3.55	6.15	26.40 ***	91.64 ***	.64
6月	2.05	1.60	2.06	1.92			
制服着装 行動得点	2.17	5.29	3.14	5.83	10.23 **	153.91 ***	.87
11月	1.98	1.39	1.92	1.56			

注)* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$ 上段:平均値、下段:標準偏差

分析方法

各変数が制服着装行動（6月）に与える影響を検討するため、調査1における制服着装行動得点を従属変数とする繰り返しによる階層的重回帰分析（強制投入法）をおこなった。

まず、公的自意識・私的自意識・対人不安意識・自己顕示性を独立変数、個人志向性・社会志向性を従属変数とし、次に、これら6変数を独立変数、学校規範・ルールに関する意識である校則遵守意識・校則必要性意識の2つを従属変数とし、さらにこれら8変数を独立変数、制服着装行動意識である自己呈示意識・評価懸念意識・校則準拠意識の3つを従属変数とし、最後にこれら11変数を独立変数、制服着装行動得点を従属変数とする重回帰分析をおこなった。

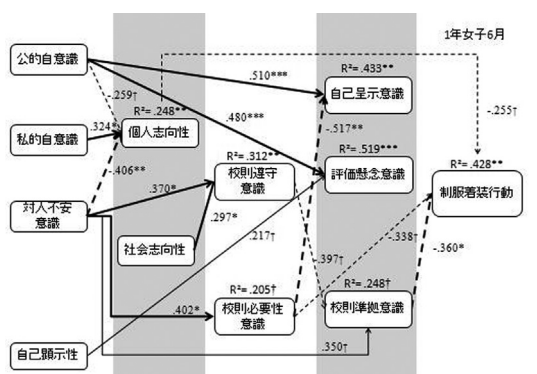
続いて調査2（11月）についても同様の手法を用いて分析をおこなった。個人志向性・社会志向性および、学校規範・ルールに対する意識については、短期間での意識変化は起こりにくいと考え6月のデータを使用した。したがって、まず11月における公的自意識・私的自意識・対人不安意識・自己顕示性を独立変数、個人志向性・社会志向性を従属変数とし、次に、これら6変数を独立変数、学校規範・ルールに関する意識である校則遵守意識・校則必要性意識の2つを従属変数とし、これら8変数を独立変数、11月における制服着装行動意識である自己呈示意識・評価懸念意識・校則準拠意識の3つを従属変数とし、最後にこれら11変数を独立変数、11月における制服着装行動得点を従属変数とする重回帰分析をおこなった。

制服のデザインが男女で異なり、諸変数の影響も男女で異なることが考えられるため、分析は男女別々に行った。以下、結果とともに考察も加えながら、女子の結果、男子の結果、その中でそれぞれの学期、学年による結果を順にみていくことにする。

女子における各変数の影響について

1. 学年に共通してみられた特徴

1学期（6月） 「私的自意識」から「個人志向性」へ正の、「対人不安意識」からは負の標準編回帰係数が有意であり、「社会志向性」から学校ルールに関する意識のうち、校則は守らなければならないという「校則遵守意識」への正の、校則は必要であるという「校則必要性意識」から、かわいく着こなしたいといった制服着装行動意識の「自己呈示意識」へ負の標準編回帰係数が有意であり、また、とにかく校則通りに制服を着るという「校則準拠意識」から「制服着装行動得点」へ負の標準編回帰係数が有意であった。また、「公的自意識」から「自己呈示意識」には有意な正の標準編回帰係数を示した。



※有意な β のみを図示

注) $^{\dagger}p < .10$, $^{*}p < .05$, $^{**}p < .01$, $^{***}p < .001$

Figure 1.1 1年生女子（6月）における各変数得点が制服着装行動得点に及ぼす影響

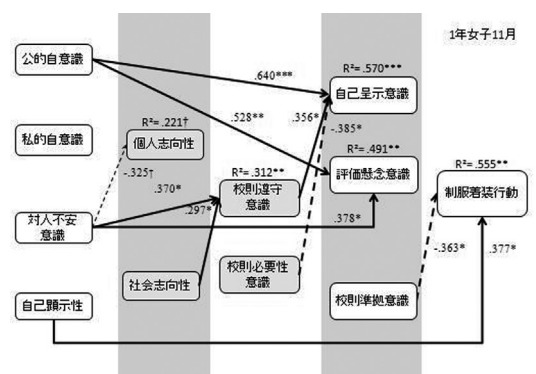
2学期（11月） 学年に共通して、「対人不安意識」から「個人志向性」、校則は必要であるという「校則必要性意識」から制服着装行動意識のうち、かわいく着こなしたいといった「自己呈示意識」へまた、とにかく校則通りに制服を着るという「校則準拠意識」から「制服着装行動得点」へ負の標準編回帰係数が有意であった。また、「社会志向性」から学校ルールに関する意識のうち、校則は守らなければならないという「校則遵守意識」へ有意な正の標準編回帰係数を示した。

2. 1年生の特徴

1学期（6月） Figure 1.1 に結果を示した。自己意識の各社会的変数を媒介とした制服着装行動への影響については、「対人不安意識」から「校則必要性意識」へ正、「校則必要性意識」から「制服着装行動得点」へ負の標準編回帰係数が有意であり、また、「対人不安意識」からとにかく校則通りに制服を着るという制服着装行動意識である「校則準拠意識」へ正の有意傾向、「校則準拠意識」から「制服着装行動得点」へ有意な負の標準編回帰係数を示した。

つまり、対人的な不安意識が高い者は、校則の必要性を高く感じており、校則に準じた制服着装行動をおこなっているという。また、対人的な不安意識が高いものは、理由はどれであれとにかく校則通りに着装しようという意識を持ち、かわいく着こなしたいといった制服による自己呈示意識は低く、そのような者は校則に準じた着装行動をとっていることが明らかになった。

2学期（11月） Figure 1.2 に結果を示した。「公的自意識」、「対人不安意識」が、制服の着方に関する他の生徒からの評価を気にするという制服着装行動意識である「評価懸念意識」に有意な正の標準編回帰係数を示した。「制服着装行動得点」へは「自己顕示性」か



※有意な β のみを図示

注) $^{\dagger}p < .10$, $^{*}p < .05$, $^{**}p < .01$, $^{***}p < .001$

Figure 1.2 1年生女子（11月）における各変数得点が制服着装行動得点に及ぼす影響

らの有意な正の標準偏回帰係数がみられた。また、校則は守らなければならないという「校則遵守意識」からかわいく着こなしたいという制服着装行動意識である「自己呈示意識」に対して正の影響を示した。

つまり、他者から見られる自己への注意が高く、あるいはまた対人的な不安が高い者は、制服の着方に関わって自分が他者からどう思われているかを強く気にするということが明らかになった。校則は守らなければならないという意識が強いほど、制服の着方を通して自己呈示をしたいという意識が強いということも示された。

3. 2年生の特徴

1学期（6月） Figure 2.1 に結果を示した。1年生女子と共通した影響の他は、「校則必要性意識」に対する「私的自意識」から負の、「社会志向性」からの正の標準偏回帰係数が有意であった。社会的変数を媒介して制服着装行動を予測するものはみられず、「制服着装行動得点」へは、とにかく校則通りに制服を着るという制服着装行動意識である「校則準拠意識」からのみ有意な影響がみられた。

つまり自己の内面への意識が強い者ほど校則の必要性を意識しておらず、他者や社会の規範に従うことを志向する者ほど、校則の必要性を意識していることが明らかになった。また、理由はともかく校則通りの着装行動をするという意識が強い者ほど、校則に従った制服着装行動をとることが示された。

2学期（11月） Figure 2.2 に結果を示した。「自己顕示性」からかわいく着こなしたいという制服着装行動意識である「自己呈示意識」に有意な正の標準偏回帰係数を示した。また「対人不安意識」は「個人志向性」を媒介として、他の生徒からの評価を気にするという制服着装行動意識である「評価懸念意識」に有意な負の影響を示した。

また、「公的自意識」が「自己呈示意識」を媒介として「制服着装行動得点」に正の、さらに「対人不安意識」と「社会志向性」が「校則必要性意識」を媒介として、「制服着装行動得点」に負の影響を示した。

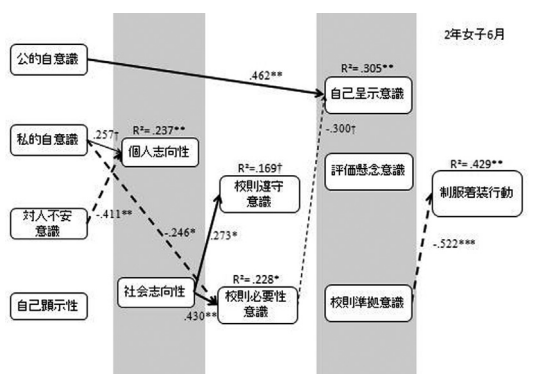
つまり、他者から見られる自己への注意が高い者は、かわいく着こなしたいといった制服による自己呈示意識を強く持ち、逸脱傾向のある着装行動をとることが示された。また、対人的な不安が高い者は、校則の必要性を高く意識し、制服による自己呈示意識を持たず、校則に従った制服着装行動をとることが明らかになった。また、対人的な不安が低い者は、個性を活かした生き方を志向し、制服の着方に関する他者からの評価に対する懸念が低いということも示された。

4. 1年生についての考察

1学期の時点では、購入した状態のままの着こなし方をしている女子生徒が多数を占めていた。自己の内面へ注意が向いており、かつ対人的な不安が低い者は、個性を活かした生き方を志向する傾向が弱く、校則に準拠した着装行動に近いスタイルを選択していることが示された。

つまり、当該高等学校の多くの生徒が着装し、生徒の集団規範となっていると考えられる着装行動は、ブレザーやカッターシャツのボタンを多く外したり、スカートの丈を短くするといった行動であるが、入学したばかりの時期にこのような行動を選ぶ者は、校則の必要性を感じていなかったり、また自分らしさを活かした生き方をしたいと思っている者であると考えられる。

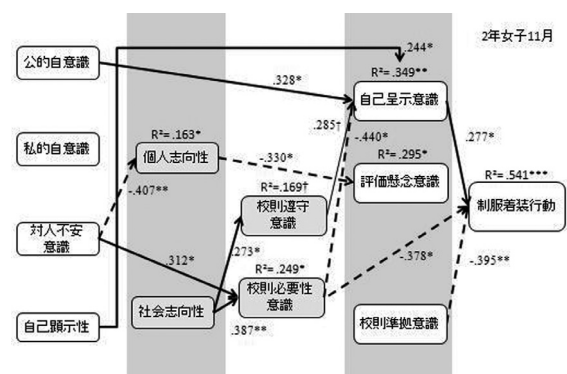
2学期になると、ブレザーやカッターシャツのボタンを多く外したり、スカートの丈を短くするといった着装行動が1年生においても集団規範となっていると考えられる。2学期には、自分を見て欲しいという自己顕示性が高い者が、校則に準拠したスタイルではなく、流行を採用した着装行動をとっていると考えられ



※有意なβのみを图示

注) † $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

Figure 2.1 2年生女子（6月）における各変数得点が制服着装行動得点に及ぼす影響



※有意なβのみを图示

注) † $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

Figure 2.2 2年生女子（11月）における各変数得点が制服着装行動得点に及ぼす影響

る。各自己意識変数が、直接的に制服着行動を予測はしなかったものの、他者から見られる自分への注意である公的自意識と対人的な不安が着行動に関わる意識を予測した。対人的な不安が高い者は、校則は守らなければならないという意識が高く、制服による自己呈示的な動機も高かった。1年生の女子生徒集団の制服着装の規範が、やや逸脱傾向のあるスタイルになったことを踏まえると、多数派となった着行動が集団圧力として対人的な不安の高い者に作用している可能性が考えられる。さらに不安の高い者は、制服に関わる他者からの評価に対する懸念も高い。1年生は新しい友人関係の形成段階であり、着行動という可視化された行動を手がかりにしていることも十分に考えられ、制服着行動に関わる意識についてさらに詳細に検討する必要もあろう。

5. 2年生についての考察

2年生女子の特徴として、他者や社会の規範に従った生き方を志向する社会志向性の影響があげられる。社会志向性が校則必要性意識を媒介として、制服をかわいく着こなすといった自己呈示意識を低めていた。このような生徒は、多くの女子生徒が校則から逸脱傾向のある着行動をとっていると考えられる中で、校則準拠傾向のある着行動をとっていることが明らかになった。対人的な不安による影響だけでなく、社会への意識が、自分らしさを追求するような自己呈示的な行動を抑制している可能性が示唆されたといえよう。

さらに2学期になると、対人的な不安は個人志向性を媒介として、制服の着方に関わる他者からの評価に対する懸念を低めていた。つまり、対人的な不安が低い者は、自分らしさを活かすような生き方への志向性が高く、このような志向性が、他者からの評価に対するネガティブな反応を低減させると考えられる。高校生活も折り返しの時期を迎え、安定した友人関係を築

き、1年生にみられたような不安要素は減少しているのではないだろうか。

男子における各変数の影響

1. 学年に共通してみられた特徴

1学期（6月） 「対人不安意識」から「個人志向性」へ有意な負の標準編回帰係数、「制服着行動得点」へは他の生徒からの評価を気にするという制服着行動意識である「評価懸念意識」から正の、とにかく校則通りに制服を着るという制服着行動意識である「校則準拠意識」から負の有意な影響がみられた。

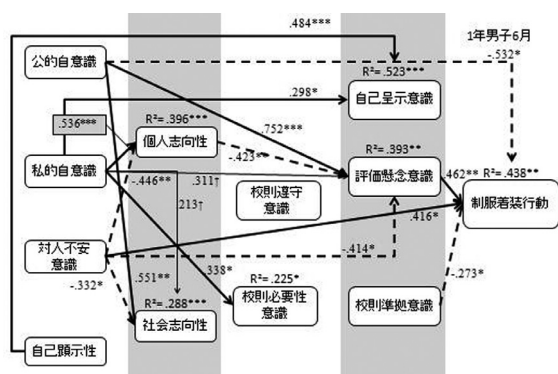
2学期（11月） 学年に共通した特徴はとくにみられなかった。

2. 1年生の特徴

1学期（6月） Figure 3.1 に結果を示した。1年生男子（6月）においては、「対人不安意識」から「制服着行動得点」への正の標準編回帰係数が、「公的自意識」からは負の標準編回帰係数が有意であった。「私的自意識」から「校則必要性意識」、制服着行動意識のかっこよく着こなしたいという「自己呈示意識」に対してそれぞれ有意な正の標準編回帰係数を示した。

「公的自意識」は「評価懸念意識」を媒介として「制服着行動得点」に影響を示し、「私的自意識」は、「個人志向性」および「評価懸念意識」を媒介として「制服着行動得点」に影響を示した。また、「対人不安意識」は「評価懸念意識」を媒介として「制服着行動得点」に有意な影響を示した。

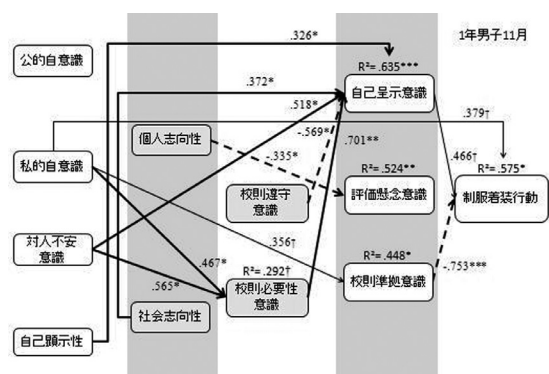
他者から見られる自己への注意が高い者は、制服の着方に関わって自分が他者からどう見られているかという懸念が強く、やや逸脱傾向のある着行動をとることが示された。一方、自己への内面への注意が高い者は、個性を活かすような生き方を志向し、制服の着方に関する他者からの評価に対する懸念は低く、校則



※有意なβのみを图示

注) $^{\dagger}p < .10$, $^*p < .05$, $^{**}p < .01$, $^{***}p < .001$

Figure 3.1 1年生男子（6月）における各変数得点が制服着行動得点に及ぼす影響



※有意なβのみを图示

注) $^{\dagger}p < .10$, $^*p < .05$, $^{**}p < .01$, $^{***}p < .001$

Figure 3.2 1年生男子（11月）における各変数得点が制服着行動得点に及ぼす影響

に従った着装行動をとることが明らかとなった。また、対人的な不安意識が強い者は、やや逸脱傾向のある着装行動をとることが示された。

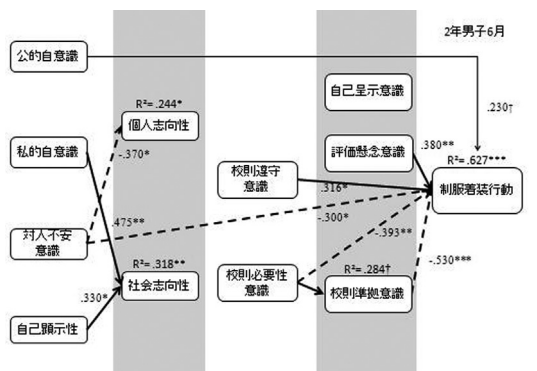
2 学期（11 月） Figure 3.2 に結果を示した。1 学期と同様に、「自己顕示性」からかっこよく着こなしたいという制服着装行動意識の「自己呈示意識」に正の影響を示した。また「対人不安意識」は、「校則必要性意識」、制服着装行動意識の「自己呈示意識」のそれぞれに対して有意な正の影響を示し、「自己呈示意識」へは「社会志向性」も同様の影響を示した。校則は守らなければならないという「校則遵守意識」から制服着装行動意識の「自己呈示意識」へは有意な負の標準偏回帰係数を示した。

自己意識の社会的変数を媒介として影響についてみると、「私的自意識」が「校則必要性意識」を媒介としてかっこよく着こなしたいという制服着装行動意識の「自己呈示意識」に正の影響を示した。

対人的な不安の高い者、および他者や社会の規範に従った生き方を志向する者ほど、かっこよく着こなしたいといった制服での自己呈示意識が高く、やや逸脱傾向のある制服着装行動をとっている可能性が示唆された。

3. 2 年生の特徴

1 学期（6 月） Figure 4.1 に結果を示した。「私的自意識」、「自己顕示性」から「社会志向性」へそれぞれ有意な正の標準偏回帰係数がみられた。「制服着装行動得点」へは、他の生徒からの評価を気にするという制服着装行動意識である「評価懸念意識」、校則は守らなければならないという「校則遵守意識」がそれぞれ正の、「対人不安意識」、「校則必要性意識」、とにかく校則通りに制服を着るという制服着装行動意識である「校則準拠意識」からはそれぞれ負の標準偏回帰係数が有意であった。「公的自意識」からは有意傾向で



※有意な β のみを図示

注) $^†p < .10$, $^*p < .05$, $^{**}p < .01$, $^{***}p < .001$

Figure 4.1 2 年生男子（6 月）における各変数得点が制服着装行動得点に及ぼす影響

はあったものの正の影響を示した。

対人的な不安意識が低い者ほど、校則に従った着装行動をとることが示された。校則の必要性意識が高い者ほど校則に従った着装行動をとり、必要性の意識が低い者ほど逸脱傾向のある着装行動をとることが明らかになった。しかし、校則は守らなければならないという意識が高い者ほど、逸脱傾向のある着装行動をとることも示された。

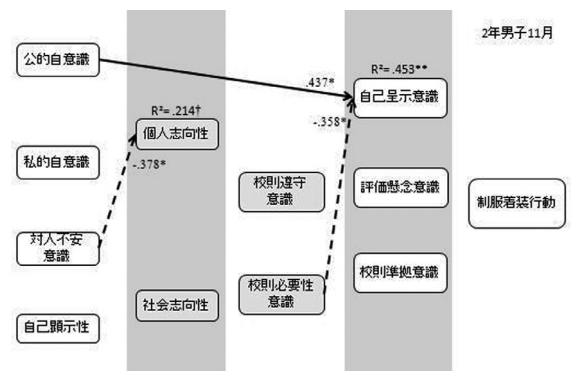
2 学期（11 月） Figure 4.2 に結果を示した。「対人不安意識」から「個人志向性」への負の標準偏回帰係数が有意であった。またかっこよく制服を着こなしたいという制服着装行動意識の「自己呈示意識」には、「公的自意識」から正の、「校則必要性意識」から負の有意な影響がみられた。「制服着装行動得点」への有意な影響はみられなかった。

他者から見られる自己への注意が高い者ほど、かっこよく着こなしたいといった制服による自己呈示意識が高く、校則の必要性意識が高い者ほど自己呈示意識は低いことが示された。対人的な不安意識が低い者は個性を活かすような生き方を志向することが明らかになったが、制服着装行動への影響はみられなかった。

4. 1 年生についての考察

1 年生男子は 6 月において最も複雑な影響を示した。1 年生は、多数のものが購入したままの着装行動をとっており、カッターシャツの第 1 ボタンを外すなど、違反とは判断されないものがほとんどであると考えられる。ブレザーやカッターシャツのボタンを多く外すなどといった行動をとっているものはごく少数であった。

他者から見られる自分へ注意が向いている者は、校則遵守傾向、つまり購入したままの状態を着装していることが示された。また、対人的な不安意識が低い者は自分らしさを活かした生き方を志向し、他者から制服についてどう思われてるかという懸念が低いことも



※有意な β のみを図示

注) $^†p < .10$, $^*p < .05$, $^{**}p < .01$, $^{***}p < .001$

Figure 4.2 2 年生男子（11 月）における各変数得点が制服着装行動得点に及ぼす影響

示され、校則遵守傾向の強い着装行動をとっていると考えられる。一方で、対人的な不安が高い者は、違反傾向のある着装行動をとることが明らかになった。しかしながら、この時点での逸脱傾向は、着装行動の分布より校則違反とは判断されないものが含まれている。

2学期になると、対人的な不安意識が高い者ほど、かっこよく着こなしたいといった制服による自己呈示意識を持つことが示された。また、校則は守らなければならないという意識が高い者は、制服による自己呈示的な動機は低い、必要性意識が高い者は自己呈示的な動機が高いことが示された。

このように、対人的な不安意識が相反する意識を予測した。2学期においては不安というネガティブな反応による影響が着装行動としてはっきりと可視化されているとは判断できないが、不安傾向が強い者ほど逸脱傾向のある着装行動をとる可能性が示唆された。したがって、1年生男子については、学校生活に適応するために、対人的な不安をマネジメントする必要性があるといえるのかもしれない。

5. 2年生についての考察

2年生になると、購入した状態のままという着装行動をする者は減り、多くの者がカッターシャツのボタンを外すなど、やや逸脱傾向のある着装行動をとっている。しかし、当該高等学校の男子生徒に関しては、大きく逸脱した着装行動をとる者はごく一部の生徒であった。

1学期にみられた、自己の内面に対する意識と、自分に注目して欲しいという意識の高まりが、他者や社会の規範に従った生き方への志向である社会志向性の高まりを予測した。これらは伊藤（1993）が指摘した、男子の個人志向性および社会志向性は両者が関連を強めながら発達していくという発達過程の様相を支持するものであると考えられる。つまり、自己の内面へ注意を向けるようになり、自分らしさとは何であるのかという理解を進めることが、社会の規範に応じていくにあたり必要であると考えられる。

2学期には、他者から見られる自分へ注意が向いている者は、制服をかっこよく着こなしたいといった自己呈示的な動機が高く、校則の必要性を高く意識している者は、自己呈示的な動機は低いことが示された。とはいえ、着装行動を予測する変数は示されなかったことから、本研究で扱った変数以外の者が影響しているのか、あるいは意図を持たない行動であるのか、検討する必要がある。

全体にみられた特徴

1学期には、対人不安意識が高い者は、自身の個性

を活かした生き方を志向せず、また、きちんと見えるように制服を着たり、面倒なので校則通りに着ようという「校則準拠意識」を持つ者は、逸脱度の低い、校則に従った制服着装行動をとることが示された。

2学期には、1年生男子を除く全てにおいて、「公的自意識」から、かっこよく・かわいく着こなしたいといった制服着装行動意識の「自己呈示意識」へ有意な正の標準編回帰係数がみられ、「対人不安意識」から「個人志向性」へは負の標準編回帰係数を示した（1年生女子は有意傾向）。

これらのことから、対人的な不安意識は、高校生が自分らしさに気づき、それをのばしていくことを妨げる恐れがあるといえよう。他者から見られる自分への意識が、制服による自己呈示意識を促すといった結果も得られたが、総じて自分に注目して欲しいというポジティブな自己意識よりも、ネガティブな対人的な不安意識が多くの変数を予測していた。自分らしさを活かす生き方への志向性である個人志向性は、制服に関わる他者の評価に対する懸念を低くする可能性も示唆された。対人的な不安を抱えやすい時期であるが、自己の内面への注意の向きやすさが、自分らしさを活かす生き方への志向性を促すことから、他者からの評価を過剰に心配する必要がない場を保障し、安心して自己を見つめることができる環境を整えることが必要であろう。

また、制服着装行動意識のうち、校則通りに着装するという「校則準拠意識」は一貫して校則遵守傾向のある着装行動を予測しており、妥当な結果が得られた。しかしながら、この意識の中には、教師による指導を回避したいという消極的な動機と、きちんと制服を着たいという積極的な動機とが分別されていない。規範意識の高さによるものなのか、制服を校則通りに着たいという態度であるのか、検討の余地がある。

まとめ

学年による違いを検討した結果、男子では、自己意識を始めとする各社会的変数が制服着装行動に及ぼす影響が、学年間で大きく異なった。入学当初の1年生男子には複雑な影響過程がみられたが、2年生においては有意な影響はほとんどみられなかった。特に2年生男子は、自分をよく見せたいという自己顕示性が高いにもかかわらず、制服着装行動には直接的な影響を示さなかった。本研究で得られた知見はコーホートによる効果もあり検討の余地があるが、男子生徒は自己を表現する手段として制服着装行動を捉えていない可能性も考えられる。つまり、制服着装行動は、自己意識や学校規範意識とは独立したものである可能性である。

しかし男子の着装行動がおおむね校則から逸脱したものでなかったことについては、当該高等学校が指定しているブレザー型の制服は、定められたように着装することが最も好感の持てるデザインであると解されていることが一因として挙げられるかもしれない。実際に、男子は女子に比べ、校則通りに着装すること、きちんと見えるように着装するという意識が高かった。

一方、近年、女子を対象とした「なんちゃって制服」といわれるようなスクールブランドの展開が顕著であり、多くの「アイテム」が用意され洋服店で市販されている。このような価値観が学校制服にも拡大されてきていることが考えられる。学校外でも制服を着装したり、校則で定められていないアイテムを取り入れたり、私服と同じような感覚でおしゃれとして制服を着装している者もいるであろう。このような価値観を持つ者にとって、与えられたままの制服は単に「かわいい」ものではなく、何らかの工夫やこだわりを見せることで自分だけの「かわいい」ものになる。現に、本研究で制服を気に入っていると回答した女子生徒は半数に満たなかったが、自身の制服着装行動に満足している者は多かった。つまり、近年みられるように、高校生が望むようなデザインを採用した制服を導入することは、学校の人気を高めるだけでなく、「逸脱」した着装行動を抑制することにも一役買っているといえよう。

本研究において、制服着装行動には、かっこよく・かわいく着こなしたいという主体的な意志だけでなく、対人的な不安に起因する一種の同調的な反応の現れであることが示された点には意義があろう。これは、学校制度や教師に起因するものではなく、主に友人関係による不安であると考えられる。当該高等学校では概して高い規範意識を持っていることが示されたが、制服に関する規則については、はっきりした意識を持っていない者が多かった。良好な友人関係が規範意識にネガティブな影響を与えることが指摘されており（廣岡・横矢、2006）、制服着装行動についても、友人関係が同様の影響を与えている可能性が考えられる。本研究においては友人関係を考慮しなかったが、青年期の自己概念の発達には仲間集団が大きな影響を与えていることが考えられ、検討する意義があろう。

最後に、本研究の対象となった高等学校の特長について述べておく。当該高等学校は文武両道を謳い、部活動と勉学の両立を目指した学校である。生徒の自発的態度を奨励し、学校をあげて生徒を支援しており、教師と生徒の信頼関係が構築されていると思われる。当該校の生徒であることを誇りに思う生徒が多数を占めるのではないだろうか。このような学校風土で得られた知見であることを考慮すると、この結果を広く一

般化するには注意が必要であるが、現代における一般的な高校生による制服着装行動であると考えている。

引用文献

- バス A・H 著 大淵憲一（監訳）（1991）. 対人行動とパーソナリティ 北大路書房（Buss, A. H. 1986 *Social Behavior and Personality*. Hillsdale, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.）
- Buss, A. H. 1980 *Self-consciousness and social anxiety*. San Francisco: Freeman.）
- 福岡欣治・高木修・神山進・牛田聡子・阿部久美子 1998 被服と身体装飾の社会心理学的研究（7）着装意識場面および着装基準の構造とその対応関係 日本社会心理学会大会発表論文集, 39, 250-251.
- 羽賀敏雄・渋谷知佳子 2006 高校生の制服着用の意識とコミュニケーション行動 弘前大学教育学部紀要, 95, 93-102
- Harter, S. 1990 Process underlying adolescent self-concept formation. In Montemayor, R., Adams, G. R., & Gullotta, T. P. *From childhood to adolescence: A transitional period?* Newbury Park: SAGE.
- 平石賢二 1993 青年期における自己意識の発達に関する研究（Ⅱ）—重要な他者からの評価との関連— 名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科）, 40, 99-125.
- 廣岡秀一・横矢祥代 2006 小学生・中学生・高校生の規範意識と関連する要因の分析 三重大学教育学部研究紀要（教育科学）, 57, 111-120.
- 伊藤美奈子 1993 個人志向性・社会志向性に関する発達の研究 教育心理学研究, 41, 3, 51-59.
- カイザー・S・B 著 被服心理学研究会訳 1994 被服と身体装飾の社会心理学—装いのこころを科学する 下巻 北大路書房 Pp. 127, 119-148. (Kaiser, S. B. 1985 *The social psychology of clothing and personal adornment*: McMillan.)
- 小関八重子 規範 古畑和孝・岡隆編 2002 社会心理学小辞典 [増補版] 有斐閣 Pp. 46.
- Moscovici, S., Lage, E., & Naffrechoux, M. 1969 Influence of A consistent minority on the responses of A majority in A color perception task. *Sociometry*, 32, 365-380.
- Rosenberg, M. 1979 *Conceiving the Self*. New York: Basic Books.
- Rosenberg, M. 1986 Self-concept from middle childhood through adolescence. Suls, J. & Greenwald, A. G. (Eds.) *Psychological perspectives on the self*. Vol. 3 New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.
- 下山晴彦 TOPIC 3 思春期・青年期の発達区分と発達課題 下山晴彦編 1998 教育心理学Ⅱ 発達と臨床の心理学 東京大学出版会 Pp. 181-182.
- 菅原健介 1984 自意識尺度 (self-consciousness scale) 日本語版作成の試み 心理学研究, 55, 184-188
- 牛田聡子・高木修・廣瀬逸子・福岡欣治・光澤滋美 1996 被服と身体装飾の社会心理学的研究（3）着装規範意識と被服関心度、公的・私的自意識—その年代差、男女差の検討— 日本社会心理学会大会発表論文集, 37, 76-77.